

令和元年 9 月 27 日

令和元年台風 15 号の被害支援についての活動報告

◆令和元年 9 月 21 日(土)の様子◆

【派遣先】 館山市災害ボランティアセンターの運営支援活動

【派遣者】 森戸崇行

【活動時間】 8:00～19:30 頃まで

【活動内容】

- ・会場準備（受付ブースの設営等）
- ・受付
- ・活動報告受け
- ・証明書等発行
- ・ボランティアニーズのあった方の住居地の特定作業（住所地図調べ）
- ・ミーティング（1 日の振り返りと翌日に向けた話し合い）
- ・翌日準備

【会場】 館山市社会福祉協議会（受付等は敷地内のテントにて実施）

【活動の様子】

ボランティア参加者の流れは、
受付→オリエンテーション→マッチング→送り出し→現場でのボランティア活動→
活動報告・健康状態チェック→証明書等発行→終了

館山市社会福祉協議会の方の他、市川市社会福祉協議会、毛呂山町社会福祉協議会、川越市社会福祉協議会、松戸市社会福祉協議会、千葉県精神保健福祉士協会（千葉県社会福祉士会からの要請依頼による）らとともに受付の運営を行いました。

◆ 受付

個人情報登録の登録、ブルーシート張り、建設関係、医療関係者などの災害支援で活用できる専門の有無の確認、ボランティア保険の確認などを行ない、名札の作成（ガムテープに専門の記入、カタカナ表記による名前記入をしてもらう）、そしてオリエンテーションのテントへの誘導を行いました。

この日は早い時間から人数が多く集まってこられたため、受付開始時間を少し前倒しました。

◆ ボランティア要請を受けたニーズ票の住所地探し

受付が落ち着いた 11 時頃より、受付からニーズ票に上がっている方の所在地を、住所地

図で探し、コピーをとって自宅の位置に印をつけてニーズ票につける作業を行いました。

現在は、ゼンリンの住所地図のソフトを使い PC 上で探せるようにしたと聞いています。

メリット：作業は簡単になり、より素早く見つけられる。

デメリット：使用する PC にあるデータの個人情報管理の観点から、ボランティアに依頼しにくい。

◆ 活動報告受け及び証明書類発行

受付に戻り、12 時で受付時間終了後は、活動から戻ってくる方の対応で活動報告受けと証明書類等の発行を行いました。

順次帰ってこられるボランティアの方々（基本的に何名かのチームで動いてもらうので、チームリーダーとのやりとり）からの報告を受け、報告の欄に記入していただく案内をする。

ニーズ票にあがっていた作業を行って帰ってこられたボランティアの皆さんに、その活動の終了か継続の確認をするのですが、実際に行ってみるとニーズ票とは違った新たなニーズがあったり、ボランティアの方が気になった点があったりなど、元のニーズ以外に潜在している課題や新たなニーズが生まれているなどがありました。活動報告の受けは、こうした点をボランティアの方から引き出すように聞き取りをしていく形で行いました。

証明書の発行は、高速道路や指定のバスの運賃等の無料化措置に伴う各証明書類の手続きで、確認印を押すことなどを行ないました。各バス会社で対応・ルールが異なる事があり、さらにそのルールが途中で変更となることもあり、随時情報を更新する必要がありました。

◆ ミーティング

本部、受付班、オリエンテーション班、マッチング班、送り出し班とそれぞれのその日の課題やエピソードなどの共有をし、翌日以降の対策の検討がされました。

◆ 翌日の前日準備

レイアウト変更、表示の修正等、明日に向けてできる準備を行い、終了。

◆ その他

〔天候による活動制限〕

連休最終日の 9 月 23 日は、強風の予報があり、ブルーシート張りなど危険が高いと判断され、前日にボランティアの受け付けは中止であることをホームページやフェイスブックで流しました。

【感想】

飛び石の 2 日間の活動でしたが、現地のニーズはまだまだあり、今はブルーシート張りが多いですが、これから先ニーズが変わりながら続いていく事が想定されました。

また、ブルーシート自体も例えば、土嚢の袋や紐の耐久性の問題があり、白いものは紫外線に弱く、3～6ヵ月で切れてくるという話も聞きました。このようなことも考えると、ブルーシートの張り直し作業など、今行われているものが繰り返し必要となる事も想定される状況です。このような生活環境において、生活上の困りごとも続くことが想定される事から、生活面への災害支援は、ニーズが変化していきながら長期的に必要となると思われるので、どのように支援を続けていくかを検討していく必要があるとも思いました。

館山市の社協の皆さんに限らず、それぞれの地域で地元の人たちは目いっぱい力を注いでいます。少しでも力を緩めて生活できるように支えていけるような活動ができればと思います。



報告者：千葉リハビリテーションセンター SW 森戸 崇行